氏　　名　出村嘉史（で むら よし ふみ）
学位の種類　博　士（工　学）
学位記番号　工博第2323号
学位授与の日付　平成15年11月25日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　工学研究科環境地球工学専攻
学位論文題目　京都東山山辺における近代以降の景観変容に関する研究

論文調査委員　（主査）教授 樋口忠彦　教授 高橋康夫　助教授 川崎雅史

論文内容の要旨

本論文は，近世から近代に成立した京都東山の山辺界隈における景観形成のプロセスを，測量とデザインサーベイ調査に基づく図面記述とCGによる地形モデルの分析によって論じたものであり，5章から構成されている。

第1章は序論であり，研究の背景と目的を述べ，山辺の景観研究，都市形成史の研究分野における既往研究の中で研究の位置づけを行った。

第2章では，大正8年の都市計画法の制定を機とした近代京都市の都市計画や琵琶湖疏水の建設などの主要な開発の経緯と市街化領域の拡大を調べ，東山山辺の景観変容の概要と研究対象とする領域の特定を行った。

第3章では，地形表現モデルの分析に基づいて，神楽岡界隈は，吉田山と紫雲山の二つの独立丘陵地形から形成されることを示し，吉田神社，金戒光明寺の参道とそれを基軸とした門前町を含む街路網の景観特性を示した。近代の吉田山の東斜面に開発された広域な茶室庭園と谷川住宅の敷地形の断面構成と大文字山への眺望を主とした景観特性を抽出し，固有な斜面の風景美を形成する建築と庭園の統合的な景観設計を評価した。近世の簡易な装置を用いた野遊びの特徴から近代的な数寄の空間を加え，茶室庭園と住居群を丘陵地に並置した谷川茂次郎による広域的な開発は，それ以後人々の文化的活動の場所として定着し，周辺領域の形成へ影響を与えたことから，近代京都のニュータウン形成の独自性として位置づけられることを指摘した。

第4章では，浄土寺・鹿ケ谷の界隈が，緩傾斜から隆起する地形あるいは谷と扇状地の接触する地形の山裾に社寺が位置し，連続する広い野に田園地帯と集落が形成されたことを示した。山際に位置する複数寺院の境内の地形断面の敷地構成と境内における景観特性と変容のプロセスを明らかにした。近代の琵琶湖疏水分線の建設に基づく哲学の道と，橋本関雪，住友春翠による疏水分線周辺の緑地（庭園）や疏水縁への桜並木の形成を契機に，文人が居住した住居地域の景観形成の過程を示し，山辺と疎水と住居群の統合的な景観形成のあり方を考察した。

第5章では，円山公園の界隈が，山際の急傾斜から緩傾斜にいたる広域的な地形上に，円山，真葛ヶ原・祇園社の領域が形成されたことを示した。山際に位置する円山の領域は，近世においては複数の時衆寺院の塔頭群が複合して名所界隈を形成したことを示し，安養寺の六阿弥に展開された急傾斜地形の眺望性に特化した懸崖建築と，地形との一体的な造成による回遊庭園との統合的な景観設計について評価した。祇園社の空間領域は，門前に配置された二軒茶屋が祇園町から訪れる人々を滞留させる小広場的な敷地と，楼門から内側の広大な境内と，掛茶屋のある祇園林によって構成された。近代における公園制度の導入を機に西洋化の影響により複雑化し敷地を，近世庭園の敷地や微地形を考慮した敷地造成と遣水利用によって景観域全体の一体化を図った小川治兵衛の景観設計の評価を行った。

第6章は結論であり，本研究での得られた成果について要約した。さらに，庭園，住宅群，茶屋などの敷地的な性格を有し複合的な景観域を構成する景観要素とその関係性の考察に基づいて，各研究対象領域の形成プロセスを概念的に整理した。

論文審査の結果の要旨

本論文は，京都東山の山辺を対象にして，近代以降の市街地の急速な拡大にもかかわらず，なぜ自然と市街地とが一体化した比較的良質な景観領域〈景域〉がここに形成されたのか，その理由を，歴史文献資料調査，ヒアリング調査，地形・敷地の空間デザイン調査などにより，近代以降の東山山辺の景観変容過程を詳細に分析することにより明らかにしようとしたものである。得られた主な成果は以下の通りである。

1．神楽岡界隈は，吉田山と紫雲山の二つの独立丘陵地形から形成されることを示し，吉田神社，金戒光明寺の参道とそれを基軸とした門前町を含む街路網の地形断面に基づく景観特性を明らかにした。近代の吉田山斜面に開発された広域な茶室庭園と谷川住宅の敷地形の断面構成と大文字山への眺望を主とした景観特性を明らかにし，斜面建築と庭園の統合的な景観設計を評価した。

2．浄土寺・鹿ケ谷の界隈は，緩傾斜から隆起する地形あるいは谷と扇状地の接触する地形の山裾に社寺が位置し，西側の広い野に田園地帯が形成されたことを示し，複数寺院の境内の地形断面の敷地構成と景観特性を明らかにした。近代の琵琶湖疏水分線の建設に基づく哲学の道と文人が居住した住居地域界隈の景観形成の過程を示し，山辺と疎水の統合的な景観形成の手法を考察した。

3．円山公園の界隈は，山際の急傾斜から緩傾斜にいたる広域的な地形上に敷地形成されたことを示した。近世においては複数の時衆寺院の塔頭群が複合して名所界隈を形成したことを明らかにし，急傾斜地形の眺望性に特化した懸崖建築と一体的造成による回遊庭園の統合的な景観設計を評価した。近代においては庭園の敷地と微地形を考慮した敷地造成と遣水利用を展開し広域的な近代公園を形成した小川治兵衛による景観設計を評価した。

4．庭園，住宅群，茶屋などの敷地的な性格を有し複合的な景観域を構成する景観要素とその関係性の考察に基づいて，対象領域の形成プロセスを体系的に整理した。

以上，本論文は，京都東山山辺において良質な景域を形成するうえで重要な役割を果たした，景域形成要素とそれらの景観特性および景観形成手法とを解明したもので，京都のみならず他都市における自然と都市とが調和した景域形成の計画・設計に重要な指針を与えるものである。従って，本論文は，学術上，実際上寄与するところが少なくない。よって，本論文は，博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成15年9月22日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。